特集＊水木しげる

水木しげるミニ年譜

編＝平林重雄

本「水木しげるミニ年譜」は、「水木しげる詳細年譜」から「グッズ編」「冒険旅行編」を割愛し、さらに「イベント」「雑誌連載」等の項目を一部割愛、あるいは短縮したバージョンです。

1922(大正11年・0歳)
3月8日、当時父が働いていた大阪府西成郡粉浜村(現大阪市住吉区東粉浜3丁目)で父武良茂。生後1ケ月で母と共に鳥取県境港市入船町に帰郷する。兄弟に兄宗平(2歳年上)、弟幸夫(2歳年下)がいる。

1926(昭和元年・4歳)
生まれつきうまくしゃべれず3歳までは沈黙し、4歳ではじめて言語を発したという。発した言葉は、「ネンコンババ」(猫の糞)であった。これは水木が布団で粗相をした際に猫のせいにしようと発した言葉であった。

1927(昭和2年・5歳)
兄弟や近所の子供らと遊び回る。かけっこや水泳等スポーツが好きな活発な子であった。祖父の代からまかない婦として出入りしていた景山ふさ(のんのんばあ)に可愛がられ、妖怪の話や伝説について教えられ、正福寺の「地獄極楽絵」を見る事で不思議な物へ関心を持つようになる。

1929(昭和4年・7歳)
4月、1年遅れで境尋常小学校に入学。しげると言えず「げげる」と訛ったことからゲゲと呼ばれる。ガキ大将でイタズラ好きであった。また朝寝坊でズイタ(大食漢)であった。趣味として図画、工作、収集に熱中。図画ではしばしば校内で金賞となった。収集は、昆虫、貝殻はもとより新聞のタイトルや動物の骨にまで至り、現在でもコレクターであり世界の妖怪像や仮面を収集している。小学5年生の頃にのんのんばあ死去。

1935(昭和10年・13歳)
4月、無試験であった境小学校高等科に進む。高等科1年の時、学校の教頭先生が、水木の絵を「子供の絵とは思えん」と絶賛し、氏の尽力で個展を開催した。これが『毎日新聞』地方面に「少年天才画家あらわる!!」と写真入りで掲載される。気をよくした水木は気取って「茂鉄」という雅号を名乗り、その後も「天昆童画集・天上の巻」や「茂鉄似顔絵集」を創作していく。「茂鉄」とは、強いしげるを意味していた。

1937(昭和12年・15歳)
境港小学校高等科卒業後、大阪の石版印刷の図案職人見習いとして就職するも、のんびりとした性格に合わず2ヶ月でクビとなる。大阪の親類の紹介で中村版画社に入社したが、ここもすぐにクビになる。しばらく親類宅に居候し絵木の習作を描くが、体調をくずして帰省する。

1938(昭和13年・16歳)
両親が心配し、絵の学校ならばと、且つ無試験で入れる大阪の上本町にある精華美術学院(専門学校)に入学させた。校長兼教授つまり先生が一人しかいないという怪しい学校であった。学校の授業は一日おきで、しかも一時間程度で終了してしまい時間が余り、あいかわらずグリム原作の「ルムパルフィティイルッヘン」の絵本やオリジナルの「夢神」「スズメノ子供」などの絵本や虫の図鑑を作っていた。

1939(昭和14年・17歳)
日本美術学校(現東京芸術大学)に進学する夢のために図案学校を止め、受験資格を得る目的で農芸学校を受験する。しかし定員50名、受験数51人という条件にもかかわらず、ただ一人落第。父がジャワに保健会社の出張駐在勤務となったため、母は境港に帰り自活することになった。その為、西淀川区の毎日新聞配達所に住み込みで勤める。

1940(昭和15年・18歳)
新聞配達で働きながら日本鉱業学校採掘科を受験し合格する。しかし専門科目に全く興味がわかず、成績不振且つ欠席が多く半年で退学する。父亮一がジャワから帰国したことより甲子園口に家を借り、境港から母琴江も上京し3人で生活する。仕事も止め、しばらくブラブラしていた。なにもする事が無く戦時色も強くなり、死への恐怖に怯え、この頃に哲学書の読書をよくするようになる。人間ゲーテ自身の生き方に共感し『ゲーテとの対話』(エッケルマン著)を愛読書とする。

1941(昭和16年・19歳)
早く美術学校に行かなくては兵隊にとられてしまうと考え、学校へ行くことにする。夜間なら遅刻せずに通えると考え、日本大学付属大阪夜間中学に入学。

1942(昭和17年・20歳)
徴兵検査で乙種合格(近眼のため)。

1943(昭和18年・21歳)
夜間中学校3年の春、召集令状が来る。鳥取連隊でラッパを吹かされるが、旨く吹けずこれを断る。南と北どちらがいいかと聞かれ、暖かいほうがと答え、その結果南の激戦地ニューブリテン島(ラバウル)に岐阜連隊の補充兵として送られる。

1944(昭和19年・22歳)
現地では地獄のような軍律生活を強いられ、理不尽な体験をさせられる。前線小隊が敵軍に襲撃され只一人助かるもマラリアが発症する。寝込んでいるとき、連合軍機の空爆に遭遇し左腕を失う。この瀕死の状態の中で奇跡的に助かる。この経験が戦後一貫して価値観の根底となる。

1945(昭和20年・23歳)
ニューブリテン島内ナマレの野戦病院に移され、現地のトライ族と親しくなる。宣教師が持ち込んだ古い聖書からとってトライ族からパウロと呼ばれ、友人の域を越えて「同胞」となる。8月15日終戦、当初現地除隊をしてトライ族と暮らす事を考えるが、軍医の砂原勝巳に説得され、一度日本に帰り7年後に戻る事を約束してナマレを去る。

1946(昭和21年・24歳)
3月帰国。横須賀浦賀に駆逐艦雪風にて上陸。左腕の再手術のために神奈川臨時東京第三陸軍病院(現国立相模原病院)に入院するが、医師・医薬品不足で手術が遅れ、1年以上病院に住み着く事になる。

1947(昭和22年・25歳)
住居が東京月島の引揚者の寮となる。ここで傷病軍人の圧力団体「新生会」の一員として都内の戦災ビルを不法占拠したり、街頭募金や魚の配給業を行う。

1948(昭和23年・26歳)
武蔵野美術学校(現大学、当時は専門学校)に入学。輪タクを安く購入し、運転手に貸して収入とする。

1949(昭和24年・27歳)
「新生会」の元副会長と共に東海道募金旅行に出る。結果として失敗に終わり、最終地であった神戸でアパートを月賦で買うことにし、東京の生活を整理して引き払う。

1950(昭和25年・28歳)
神戸兵庫区でアパートを経営する。所在地の水木通りの名を取って「水木荘」とする。これが後の「水木しげる」のペンネームの由来となる。住人の一人に久保田という紙芝居絵描きがいて、紙芝居の技術

を教わり習作を描く。

1951(昭和26年・29歳)
紙芝居業のトモエ画劇社、林画劇社を経て、紙芝居演者の名人鈴木勝丸の経営する阪神画劇社の専属作家となる。鈴木勝丸の紹介で加太こうじと知り合う。「怪談・雨夜の傘」「人と犬」「ひまわりの母」「ガラス」(前後編)などを描く。

1952(昭和27年・30歳)
新開地の映画館で見たジョン・ウェインの西部劇からアイデアを得た「拳銃王」「謎の西部王」「アパッチ断崖」やSF作品の「キングコング」などを描く。
*この年7作品を描く。

1953(昭和28年・31歳)
アパートの経営もうまくいかず、究り払って西宮に二階屋を買って引っ越す。B級戦犯で巣鴨プリズンに拘留されていた兄が出所したので同居する。水木曰く「グロ悲劇物」の「猫娘」「ガマ令嬢」や、人間が異形の物に変身する悲劇を描いた大作「巨人ゴジラ」などを描く。*紙芝居4作品を描く。

1954(昭和29年・32歳)
鈴木勝丸から昔東京で伊藤正英原作の「ハカバ奇太郎」という因果物が有ったが、こういう不況の時代は因果物が当たるとアドバイスを受けて、後の人気漫画「鬼太郎作品」の前身となる「蛇人」「空手鬼太郎」「ガロ7」等を描く。また初めての戦記もの「南十字星」も描く。*合計7作品を描く。

1955(昭和30年・33歳)
これも後の漫画の前身となる「河童の三平」(前後編)を描く。また貸本漫画の「金太とピン子」のオリジナルとなる当時のヒット作「小横綱」(前編)を発表し好評を得る。*合計6作品を描く。

1956(昭和31年・34歳)
紙芝居「チビ武蔵」(前後編)「化島」「人鯨」「小人横綱」(後編)等を描く。テレビの普及が進み、紙芝居業界も低落傾向がはっきりとしてくる。*10作品を描く。

1957(昭和32年・35歳)
いよいよ紙芝居業界も衰退し、見切りをつけて貸本漫画に活路を見出すべく、単身上京し亀戸に下宿する。加太こうじの手伝いや、好評であった「小人横綱 第3部」を描き阪神画劇社に送って収入を得た。貸本漫画家相沢に水道橋にある兎月書房を紹介される。ここで他作家(宮健児)が描き残した原稿の加筆を行い『赤電話』を完成させる。

1958(昭和33年・36歳)
デビュー作『ロケットマン』を兎月書房から刊行。その他戦記物『戦場の誓い』(兎月書房)、ギャグ作品『お笑いチーム』『飛び出せピョン助』(兎月書房)、SF『怪獣ラバン』(暁星書房)、怪奇作品『怪奇猫娘』(緑書房)、『地獄の水』(暁星書房)等様々な種類の漫画を描く。*この年は、17冊の貸本を刊行。亀戸の下宿で後の講談師田辺一鶴と知り合い、バイトでベタ塗りの手伝いをしてもらう。

1959(昭和34年・37歳)
亀戸から新宿南口のアパートに転居。兎月書房で少年戦記の会として水木が責任編集と執筆を行った戦記漫画専門誌を刊行する。比較的に好評を得て翌年までの2年間で『少年戦記』全15巻、別冊4巻、姉妹誌『陸海空』全4巻、別冊1巻の全24冊を連作し、「水木しげる作戦シリーズ」として『ミッドウエイ作戦』や『決戦レイテ湾』等の戦記漫画を、またギャグ作品の「鬼亜曹シリーズ」を掲載した。他に『台風爆弾』(兎月書房)や貸本誌『バレエ』(中村書店)に少女ものの短編「雪のワルツ」「かなしみの道」を描く。

1960(昭和35年・38歳)
兎月書房から水木が新たに責任編集したSF専門誌『宇宙少年』と怪奇専門誌『妖奇伝』が新創刊された。『妖奇伝』には鬼太郎の誕生編を描いた第1話「幽霊一家」、第2話「幽霊一家・墓場鬼太郎」を発表した。いずれも2巻で廃刊となるが、熱心な読者の手紙により怪奇専門誌『墓場鬼太郎』の創刊が実現し、(墓場鬼太郎夜話」第1話「地獄の片道切符」、第2話「下宿屋」、第3話「あう時はいつも死人」を連作する。原稿料の不払いで兎月書房と一時絶縁し、三洋社(社長長井勝一)からストレートな続編『鬼太郎夜話』第1巻を刊行。

1961(昭和36年・39歳)
もうすぐ40歳になる水木を心配した両親が縁談の話を持ってくる。1月20日鳥取で見合いをし、1月30日に即結婚する。妻・布枝は上京後、執筆の手伝いやガリ版印刷による「少年戦記の会」の会誌『桜と錨』の印刷発行も手伝う。三洋社から『鬼太郎夜話』4巻、秀文社の『ああ太平洋』に「山本元帥と連合艦隊」第1部・第2部の戦記漫画を描き、異色探偵スリラー集『面(マスク)』に「半幽霊」「ねずみ町三番地」等の怪奇中編を掲載した。8月から翌年3月まで、曙出版から『墓の町』『怪奇鮮血の目』『人魂を飼う男』『墓をほる男』『地底の足音』等の怪奇漫画の傑作を連作する。また兎月書房と和解、名作『河童の三平』(全8巻)の刊行が開始される。

1962(昭和37年・40歳)
『河童の三平』完結後、『戦記日本』に「此の一戦」「硫黄島の白い旅」等の戦記漫画や、「墓場鬼太郎シリーズ」の『怪奇一番勝負』と『霧の中のジョニー』を刊行し、兎月書房は倒産。この兎月の倒産により、これまで不払いの原稿料も約束手形も無にかえる。貸本業界にも斜陽が到来。他にやなぎブロ(セントラル)から『鈴の音』『火星年代記』『妖棋死人帳』等の怪奇長編を描いた。この頃、税務署から申告所得が少なすぎると指摘されるも、質屋の赤マダの厚さが3センチにもなり電気料金も払えず蝋燭の下で仕事をするなど、極貧生活を強いられる。12月24日、長女尚子誕生。

1963(昭和38年・41歳)
水木の作品は相変わらず売れ行きが悪いため、貸本店の受けを狙って小島剛夕タッチの『呪いの谷』(全漫プロ)『嘆き川』『花の流れ星』(セントラル文庫)等の幻想怪奇ロマンものを発表する。佐藤プロから独立した桜井昌一と意気投合し、桜井が経営する東考社から創刊された貸本短編誌『黒のマガジン』『劇画NO1』に「約束」「鉛」等の傑作短編を連作した。長編では、同社より名作『悪魔くん』全3巻の刊行が開始された。当初全5巻の予定であったが第1巻の売れ行きが極端に悪く、急遽第3巻で終了しなければならなくなった。長井勝一が復帰し、青林堂から白土三平をメインに月刊貸本漫画誌『忍法秘話』を創刊、水木は、10月10日発行の第2集に風刺性の強い「忍者無芸帳」を発表し、以後第7集(64年4月1日)から21集(65年8月10日)までに全17編の傑作短編を掲載する。

1964(昭和39年・42歳)
東考社から『怪談かえり船』『猫姫様』等の「幻想ロマンシリーズ」が7作品連作された。さらに「墓場鬼太郎シリーズ」が東考社から『ないしょの話』、佐藤プロから『おかしな奴』『ボクは新入生』『アホな男』が連作される。光伸書房から創刊された貸本短編誌『日の丸戦記』と『怪談』に「二人の中尉」「海の男」「怪談水妖鬼」「へびの神」等の中短編を連作する。青林堂は、9月から月刊誌『ガロ』を創刊。これに風刺性の強い「不老不死の術」や「蝕草」等を連作して、白土三平と並んで人気を得る。貧乏生活からの脱却の糸口が見え始める。

1965(昭和40年・43歳)
貸本作品としては日の丸文庫から『青葉の笛』と戦記ギャグ漫画『ゴマスリ二等兵』等を発表。佐藤プロから『地獄』を発表する。これが水木の最後の貸本長編漫画となる。貸本業界も末期的状況になる。『月刊ガロ』(青林堂)に「イソップ漫画シリーズ」「こどもの国シリーズ」「新講談宮本武蔵シリーズ」等のシリーズ漫画や「神変方丈記」等の風刺短編作品と東冥一郎・武良茂名義でイラストとエッセイで構成した「ロータリーシリーズ」を掲載する。『別冊少年マガジン』(8月5日夏休みお楽しみ特大号、講談社)に「テレビくん」を発表し、第6回講談社児童漫画賞を受賞。これを機に貧乏生活(貸本)と決裂し多忙生活(雑誌)へと移る。まさしく貧乏神から解放され、「妖怪いそがし」に取り憑かれることとなったのだ。『週刊少年マガジン』8月1日号に「墓場の鬼太郎」「手」を掲載し、以後断続的に掲載される(全5話全6回)。『漫画天国』(芸文社)12月10日号に「10000人目の男」を発表し、その後は隔週で怪奇短編を掲載する(全18回)。

『ユリイカ 2005年9月号』より